ドットピリオド

奏真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドットピリオド

【Ｎコード】
Ｎ９６０５Ｎ

【作者名】
奏真

【あらすじ】
『よく分からない』
それが今の俺に言える全てだった

『化け物』と『妖精』
違うようで似たもの同士
よく分からない生物
それの『討伐』
それが今俺にできる唯一のこと―

一章　『序章の幕開け』（前書き）

先に謝ります。文章力、構成力、ともに皆無です。
ごめんなさいｏｒｚ

一章　『序章の幕開け』

「あーぁ・・・・・・」

青い空を見上げながら、意味のないため息をつく。
どうしようもないくらいに、過ごす時間が退屈だ。

「声」と「ささやき」
それが、今この場にある原因の全てだった

隣で頬杖をついていた『知り合いであるソイツ』が、俺と目を合わせる。
速攻で反らすのがお約束だが。

名前は――サン・フォウル――
それがこの男子の名前。

・・・思い出す必要もなくなるぐらいに、この一ヶ月。毎日
顔を合わせているわけだから、相手の名を忘れるわけはないのだが。
まぁ、言ってみれば、一種の現実逃避だ。多分

きっと、サンも今受けている『授業』が退屈なんだろうな。

「強化術と弱化術は同時にかけられますが、かけた相手に肉体に何らかの異変が起こるうえに、
その異変がどうなるかは・・・

ウィン！！聴いてましたか！？術は何と何を重ねれられて、それぞれどんな相手にかけるのか。答えなさい！！」

［石の上に立っている先生］が俺を指さし、怒鳴る。

しまった・・・あくびが見えたか

まぁ・・・反省する気はさらさらない訳だが。

ただ、その場に立ち上がり、答える。

「強化術、弱化術。強化術は味方、弱化術は敵にかける」

自分で言っている言葉がよく判らなくなってきた。と言うか、よく答えられたな。

『こんな世界』の常識なんて、俺は知らないもんだから、目の前に転がっているも同然の教科書を、丸覚え状態だ。

何にせよ、俺は『術』とか言うのを使えない。どうせだったら剣術の授業がやりたい。

そんな俺の考えを読んだかのように、サンが持っていたペンの先を俺に向け、苦笑を浮かべた。

「もうあと１０分だけだ。・・・というか、お前ほんとに術に興味ないんだな」

勿論、この質問にも意味はない。

答えにも、なにも意味はなかった

「当たり前だろ。火やら水やらをわざわざ魔方陣みたいなのをかいて発動するなんて

そんな器用なことはできないんだよ。面倒くさい」

「ズバッというなぁ・・・。というか、術は魔法じゃないって何度

も言ってるだろ？
現実と幻想をごちゃ混ぜにす・・・」
「どっちだって同じだろうが。俺にとっちゃぁ、同じなんだよ」
乗り気にならない俺に向かって少し困ったような表情を浮かべながら、
サンはノートに先生の話をまとめるため、机に目を落とした。
机、といっても石でできている物だったのだが。

今、俺のいる場所を一言で表すなら、『森』としか言えない。
俺達は、通っている『学校』の行事の為、国のはじにあるという森で、授業を行っている。
学校の名前は・・・・・・えーと・・・確か、『アビルト王国国立、ヴェスドリト学園』

どこだよそこ。

それが、俺の『この世界』で発した第一声だった。それも、たった一ヶ月前。
と言うわけで、アビルトという国も、ヴェスドリトという学園も俺は知らない
結果、説明はできない。

とりあえず、今いる状況以外は説明ができない、という、俺は結構危機的な状況に立たされている。

まぁ、何が何だか分からないまま、連れられるままに森に来たはいいが、野宿を続けて三日。
この森にいるのは、俺とサンを含めて２４人。引く、引率の先生×３で、２１人が、
バス・・・ヴェスドリト学園の『選ばれた』生徒らしい。
…選ぶと言われても・・・基準が分からないのだが。

話を戻して、この森に来た理由は、
その学園の特別授業・・・というか『課外授業』らしい。
・・・目的はひとつ。
ある生物。その『討伐』

当然、俺はその生物は見たことはない。
名前は　…

『化け物』もしくは『プーカ』

そう聞いた。

『化け物』と呼ばれ、討伐されるくらいなのだから、
言ってみれば、［悪いモノ］　の類に入っているのだろうが・・・
やっぱり、［何かを殺す］のだから乗り気はしない。

そういえば、『俺が前にいた所』では、『プーカ』って言うのは
アイルランドという国の妖精の名前だった・・・様な気がする。

『化け物』　と　『妖精』

なんでこんな両極端な呼び方をするのかなんて知ったこっちゃない。

だが・・・まぁ、確かに、はじめて妖精ってものを見た人は
妖精を『化け物』と思っても仕方はないと思うが・・・

そもそも、妖精なのかどうかすら、定かではない。
その前に、妖精がいんのかよ、という話に持っていかれるわけだが。

・・・・・今、俺のいる『この世界』ならば、いたとしてもお
かしくはないんだけどな・・・。

何て、考え――

「ウィン。・・・おーい、ウィン」

いつの間にか、サンが俺の体をゆすっていた。不思議そうに青緑
の目を細めている。

あれから10分はもうたったようだ。
暇つぶし成功。意味はないが。

「どうしたんだウィン？授業は終わったぞ」
「いや・・・別に。っつか、俺の名前はウィンじゃねェ
・・・ただ、プーカってのはどんな奴かと思ってさ」

あながち嘘ではない。

しかし、俺の返答に疑問を持ったのか、
サンは首を傾げながら口を開いた。

「お前・・・やっぱ変だな。『災厄プーカ』を知らないなんて。記
憶喪失って奴か？」

「絶対に違う」

記憶喪失なんて、そんな、俺の今までの１５年間を無駄にするようなことは、
何が何でも御免蒙る。

「大体――」

何かを言いかけて、やめた。
口から吐き出す言葉が、思いつかなかったからかもしれない。
それとも、この会話を続けたくなくなったのかもしれない。

・・・・・俺が『この世界』について何かを知っていると思ったなら、それは大間違いだ。
俺は何一つ知りやしない。
何で俺は、こんな森で授業を受けているのかも。
それ以前に、何で学園なんかに入学しているのかも。
何で太陽系の、地球の、日本にいた俺が、こんな《わけの分からない『世界』》
にいるのかすら。

長い夢なのかそうでないのかすらよく分からない。

時々、『この世界』で人と会話をしていると、
どうしようもなく嫌になる時がある。

『人殺し』である俺が、どうしてこんなことをやっているのか―

――
自分のしている行動に嫌気がさす。
そんな瞬間が、不意に襲ってくる［だけのこと］。

・・・今、考えたことも、全て　その瞬間の一部だ。
―きっと・・・深い意味はない。

「ウィン・・・？」

突然黙り込んだ俺を覗き込むように、サンは首をかしげる。

「何でもない」

誤魔化し切れていない。そんな事はわかり切っている。
ただサンは深くは何も言わず、ただ話を元に戻し始めた。

「・・・・・・『プーカ』の事だけどさ。・・・・・・まぁ、一言でいえば、『化け物』って言うしかないな」
「どんな奴なんだよ」
「姿形は統一されていないのさ。獣の姿だったり、人型だったり・・・な。
ま、お前も一回見れば分かるよ。
本当に、『化け物』だから」

・・・的を得ているのか、そうでないのか分からない。
ただ、俺は『化け物』を想像する。

「・・・わからねぇな」

想像失敗。美術の成績は1だ。
それでも尚頭の中で創造と破壊を続けようとする俺に、サンの声がかかる。
「とにかく、次の授業は昼飯を取った後だ」
不意にサンは立ち上がり、俺の頭をはたきながら言った。
「ちゃんと食えよ」
「分かってるっつの」
『こんな世界』であっても、救いがあったのは、
言葉……日本語が通じることと、食べ物が普通であったこと。
ただ、言葉に関しては何故か、英語は通じなかった。
・・・英語なんて、ほとんど使いはしないが。むしろ一切使わない。

不意にサンがひょいと片手を挙げ、少しはなれた場所にいつの間にかできていた人溜まりを指差す。
「あっちで弁当配るんだと。早く行こうぜ」
声を出さず、ただ首を縦に振って、座っていた石から立ち上がる。
・・・その時だった
「いかせるか、バーカッ！！」
突然の怒声。・・・と、ともに、　ゆら、と太い影が俺の上に落ち

る。

「！？」

何かが振り下ろされる気配を感じて、俺は後ろに飛びのいた。

《グワシャッ》

嫌な音を立て、一瞬前まで俺の座っていた石が粉々に砕ける。

「死、ねェェェェ！！」

「うるせエエェェェェェ！！！！」

後ろからの大声に、大声で返し、

身を捻って拳を突き出した。

《ボクッ》

「うわッ！？」

襲ってきた相手の顔面の前を、俺の裏拳がすれすれに通る。

仰け反ろうとしてバランスでも崩したのか、音を立てて地面に転がった襲撃者に、

とりあえず説教をかましておく。

「いきなりハンマーで人に殴りかかっていいと思ってんのか！？

この非常識野郎！！」

「うーわー・・・非常識で理不尽なのはどっちだよ・・・」

「そこ！黙れ！」

木槌に近いハンマーを視界の端に確認し、拾い上げながら、

サンの突込みを一蹴する。
「でもなぁ・・・さっきのは気付かなきゃ死んでたぞ？
ちゃんと謝った方がいいな」
同情気味にサンは地面に転がっているそれに話しかけた。
「うるさいな。今度こそウィンを倒せると思ったのに・・・」
「倒すじゃなくて、殺すの間違いだろうが。馬鹿テルー」
「うるっさいわね！！」
すごい目つきでにらんでくるが
『彼女』から睨まれるのはもうなれた。
「毎日毎日ご苦労なこったな。
いい加減諦めろっての」
「やーだねっ！アンタをブッ倒すまで諦めないの！」
立ちあがり、服に付いた汚れを手で払いながら、
テルーは俺をにらみ続ける。
残念ながら恐くはない。
…テルー・……何だっけ。……えーと……。
…テルー・ロイズ…違う。
…―テルー・ノイズ―だ。
確かそうだった。

「お前…。俺に初対面の瞬間から敵意むき出しってどういうことだよ。
恨みでもあんのか」

この質問。この一ヶ月で何回したんだろうか。

―そして…
同じ答えが何度返ってきたんだろうか。

目の前に居る女子の答えは、
いつも台本を片手に持っているかのような
いつも同じ答えだった。

「プーカは嫌い！余所者は大嫌い！！アンタはとにかく嫌いなの！
嫌いなモノは全部あたしがブッ倒す！！！」

一章　『序章の幕開け』（後書き）

長ッ
すみませんでしたｏｒｚｏｒｚ

もし見てくれた方がいたのなら、
アドバイスとかアドバイスとか。
あとアドバイスとか。お願いしますｏｒｚ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9605n/

ドットピリオド

2010年10月9日06時24分発行